古典教材を用いてPISA型「読解力」を高める
―本歌取りについて考えよう（三年）の実践から―

新潟大学教育学部附属新潟中学校
中村　雅芳

1　指示・発問と高めようとした力

本歌取りという手法を用いた二首と、その本歌一首を比較するという活動を組織した。

わが袖は水の下なる石なれや
　人に知られでかわく間もなし　　和泉式部（いずみしきぶ）

わが袖は潮干に見えぬ沖の石の
　人こそ知らねかわく間もなし　　二条院讃岐（にじょういんのさぬき）

わが袖はほのかに人を水茎（みつくき）の
　岡の木の葉のかわく間ぞなき　　藤原家隆（ふじわらのいえたか）

※右から順にC、A、Bとした。

本歌取りとは本歌のよさを認めつつ、よりよい短歌を創出しようとする営みである。およそ後代に詠まれた短歌の方が本歌を超えるものと評価されてはいるが、「すべてがそうではない」との見方や、本歌取りという表現技法自体を否定する考え方もある。

このような素材を教材として取り上げ、次のような指示・発問をすることで、PISA型「読解力」を高めようと試みた。

(1)　**「これらの短歌は詠まれた時代がそれぞれ違います。どのような情報があれば、古い順に並べられますか」→テキストの形式の熟考・評価**

生徒からは、八種類の情報（作者とその生没年、短歌が作られた年、収録されている和歌集とその成立年代、短歌に使われている語句の新旧、表現技法とそれが確立した年代）が必要だという意見が出され、それらの情報を生徒が検索、収集した。生徒が調べてもわからなかった情報は、授業者が補足した。

これらの外部からの情報を基に、どの順番で成立した短歌なのかを各々が考え、学級全体で確認した。その結果、全員がC→A→Bと結論付けた。しかしながら、議論を深める中で、理由付けに対する疑念が生まれ、A→Bが果たして本当か？　という揺れが生じた。

【本当にA→Bなのか？】

○　使用される表現技法が、質・量共に技巧的になっていくほど、時代は新しくなっていくと考えられる。しかし、本当にそう言い切れるのか。新しい時代に単純さに回帰する人がいてもいい。故にBは技巧的だが、これが決定的証拠とはならないだろう。

○　壬二集は確かに一二四五年に成立しているが作者である家隆は一二三七年に七九歳で亡くなっている。このことからもわかるように「和歌集が成立した年＝その短歌が詠まれた年」なのだ。そう考えるとAの千載和歌集成立は一一八八年だが、それを目にする前に、家隆が作った歌である可能性も否定できない。家隆の生まれた年は、一一五八年。千載和歌集成立時は三〇歳。例えば二〇歳くらいでBの歌を作っていたとしたら、順番はB→Aとなる。

○　家隆と定家は、共に新古今和歌集の編者で、共に藤原俊成（定家の父）から短歌を

学んでいる。年も四歳（家隆が年上）しか違わない。短歌のうまさでは並び称される二人だ。俊成は本歌取りを推奨し、定家が本歌取りを表現技法として確固たるものにした。その定家は、Aの短歌（本歌取り）を百人一首として選んだ。つまり評価した。故に、家隆が定家の選んだAの短歌をさらに超えようと、本歌取りをしたことが想像される。そのように、様々な周辺事実を積み重ねて考えれば、A→Bとなるのではないかという推論が成り立つ。

(2) 「あなたが和歌集の撰者で、一首選ぶとしたら、どの短歌をどんな理由から選び出しますか」→テキストの内容の熟考・評価

解釈の展開

生徒が、自分の意見をもつための根拠となる資料を用意した。資料には、三首の短歌の作者、出典、成立年代、歌意、表現技法などを詳細に示した。それ以外に、一般的に最も評価が高い讃岐の短歌のよさが書かれている文章（約四百字）と、本歌取りのプラス面、マイナス面が書かれている文章（約八百字）を示した。

生徒は最初、一四名が讃岐の短歌を、一五名が家隆の短歌を、一一名が式部の短歌を支持した。授業では、各意見の根拠を述べ合わせた。資料の文章記述を支持の根拠とする生徒もいれば、各短歌につかわれている言葉を比較し、解釈することで支持の根拠とする生徒もいた。授業者はそれらを区別して板書し、授業の終わりに、質の違いを明示した。そして、最終的な判断を生徒に求めた。結果、理由を明示して、五名が讃岐の短歌を、七名が家隆の短歌を、三名が式部の短歌を支持し、二五名の生徒が様々な根拠から「どの短歌にもそれぞれのよさがあり、一つを選べない」と結論づけた。

2 成果と課題

(1) 成果

① 三つの短歌を時代順に並べる活動において、全員が、外部の情報を根拠に、並べかえることができた。つまり、「テキストの形式の熟考・評価」の力が発揮された。

② 三つの短歌を時代順に並べる活動において、前述した論理に生徒が気付いた。つまり、「テキストの形式の熟考・評価」の力に、質の高まりがみられた。

③ 四〇名中一一名の生徒が、資料の記述を根拠として選歌した。あるいは、選歌できないと判断した。つまり、「テキストの内容の熟考・評価」の力が発揮された。

④ 四〇名中三一名の生徒が、短歌中の言葉を根拠として選歌した。あるいは、選歌できないと判断した。つまり、「解釈の展開」の力が発揮された。

(2) 課題

① 資料の記述よりも、三首間の言葉の違いに焦点が当たったため、資料を根拠とした「テキストの内容の熟考・評価」の力よりも、むしろ「解釈の展開」の力が発揮された授業となった。故に、客観的視点と生徒の主観的視点が混在する話し合いとなってしまった。→今後は、いずれかの力の高まりに焦点づけた授業を構想する。

② 根拠と意見が整合しているか否かの検討が、授業では弱かった。したがって、個人差が生じ「一番古いからCがいい」のような根拠にとどまる生徒も、少数ではあるがいた。→今後は、根拠の妥当性について深く考えさせる授業を構想する。

なかむら　まさよし　文学的文章教材において、「対比」「分割提示」「意味マップ」「思考スキル」をキーワードに、実践研究を深めている。二〇〇八年十月二十二日(水)には、芥川龍之介『鼻』を教材として、公開授業を予定している。